

AFICS 2020 / 2 / 6 Par Zoom

# 『地球倫理への旅路・力の文明からいのちの文明へ』



UNESCO  
服部 英二

———はじめに———

# COVID19パンデミックは 地球から人類への警告である

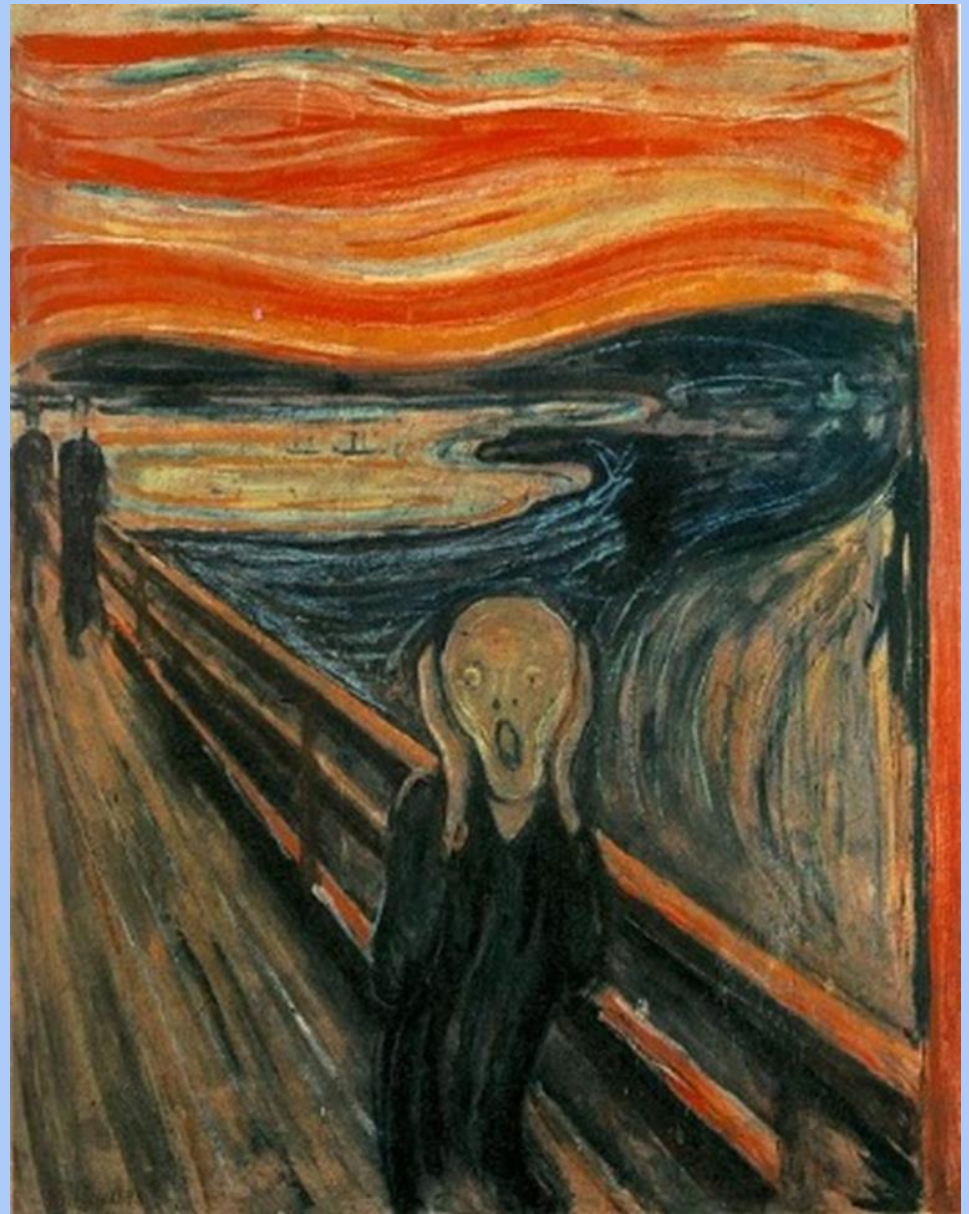
———いまは人類文明を透視する時———

# 地球は悲鳴を上げている

ムンクの「叫び」とは？

Scream この人は何をしているのか？-----

叫んで居るのではない。  
耳を塞いでいる。ムンクは、海岸で地球の  
悲鳴を聞いた。  
スクリームは「叫び」ではなく「悲鳴」



# 生命圏の破壊

---

- COP21

産業革命前に比べ、気温があと2度上がれば地球環境は取り返しがつかない不可逆点（J.Rockstromのいう Tipping point）に達する

- 人口 1972年—40億

2020年—78億

2050年—97億（？）

- エコロジカル・フットプリントによると、現在でも地球1.5個が必要

新興国がアメリカ並みの生活を欲すれば5個必要

※ 2030年までに上昇可能な全世界の平均温度で0.2度のみ

# 自然との離婚

---

人類史の20000分の1の時間帯に起こった異常事態

デカルトのCOGITOの罪、主客の分断。

自然の一部である人間が自然を客体とし非生命化した。

「非人格化した」（フランシスコ教皇の表現）

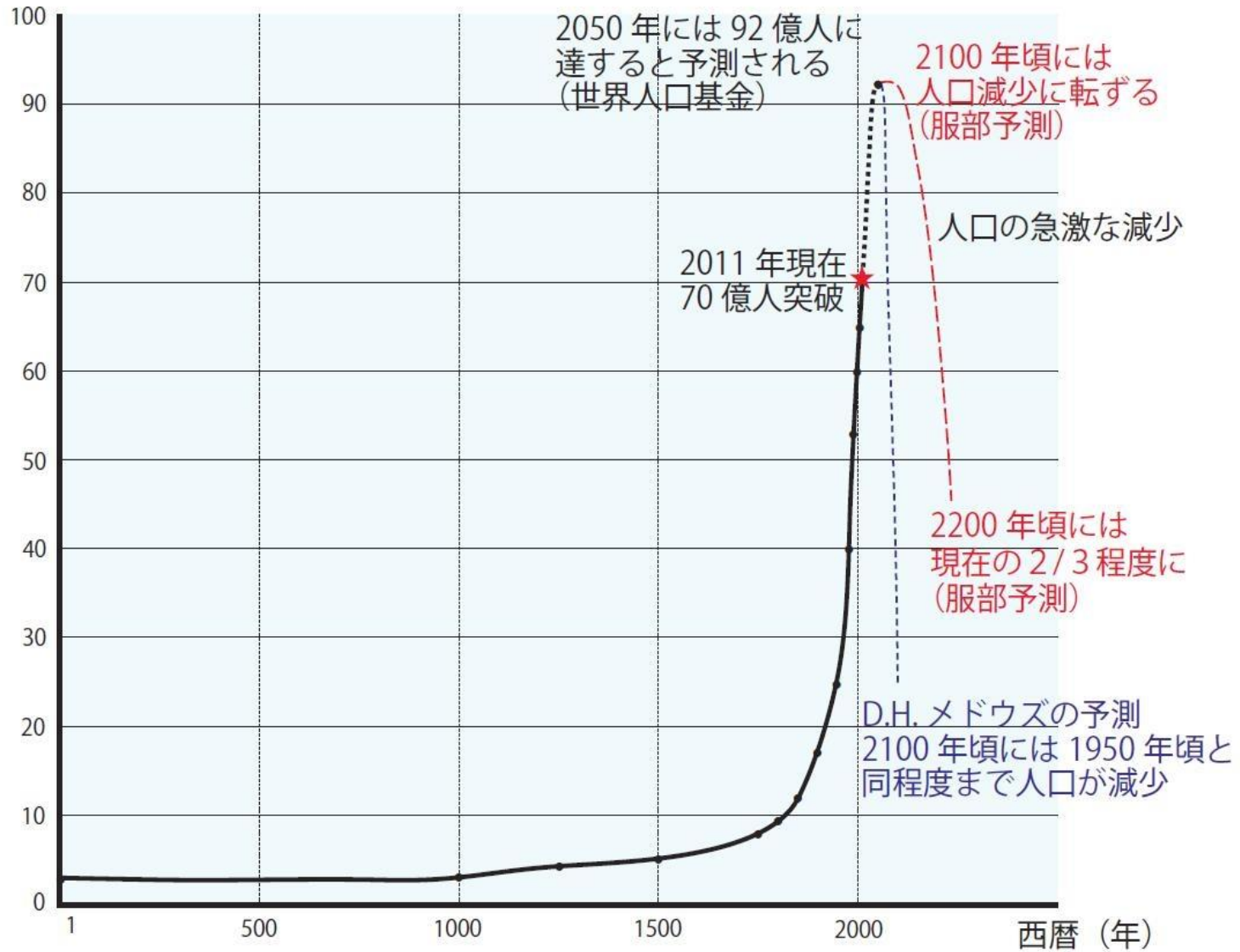
70パーセントの森を破壊した人類は、ついで森の墓場に手を出す

——→化石燃料の発見——→**人口爆発**

予測：2100年頃、異常な人口爆発は地球環境劣化により減少に転じる。

激しい痛みを伴った減少。

人口 (億)





# CCは

## もはやClimate Changeではなく Climate Crisis

「人類は地球に戦いを挑んだ。地球は必ず反撃する」

(グテーレス国連事務総長)

「自然は人類に反撃すべく無言のうちに再結集しはじめている」

(ミッシェル・セール『地球との和解』にて)

東南アジアの大洪水・オーストラリア・カリフォルニア・アマゾン等の消えない山火事・日本を襲った巨大台風・アメリカの巨大竜巻・アフリカの干ばつ・砂漠飛びバッタの大量発生・シベリアで38度等の異常気象・北極、グリーンランド等の氷の消滅、永久凍土の氷解、生物多様性の減少、等々。

この中での新型ウイルスの発生。

このままでは2100年には気温は4度上昇の予測。

地球は灼熱地獄となる。

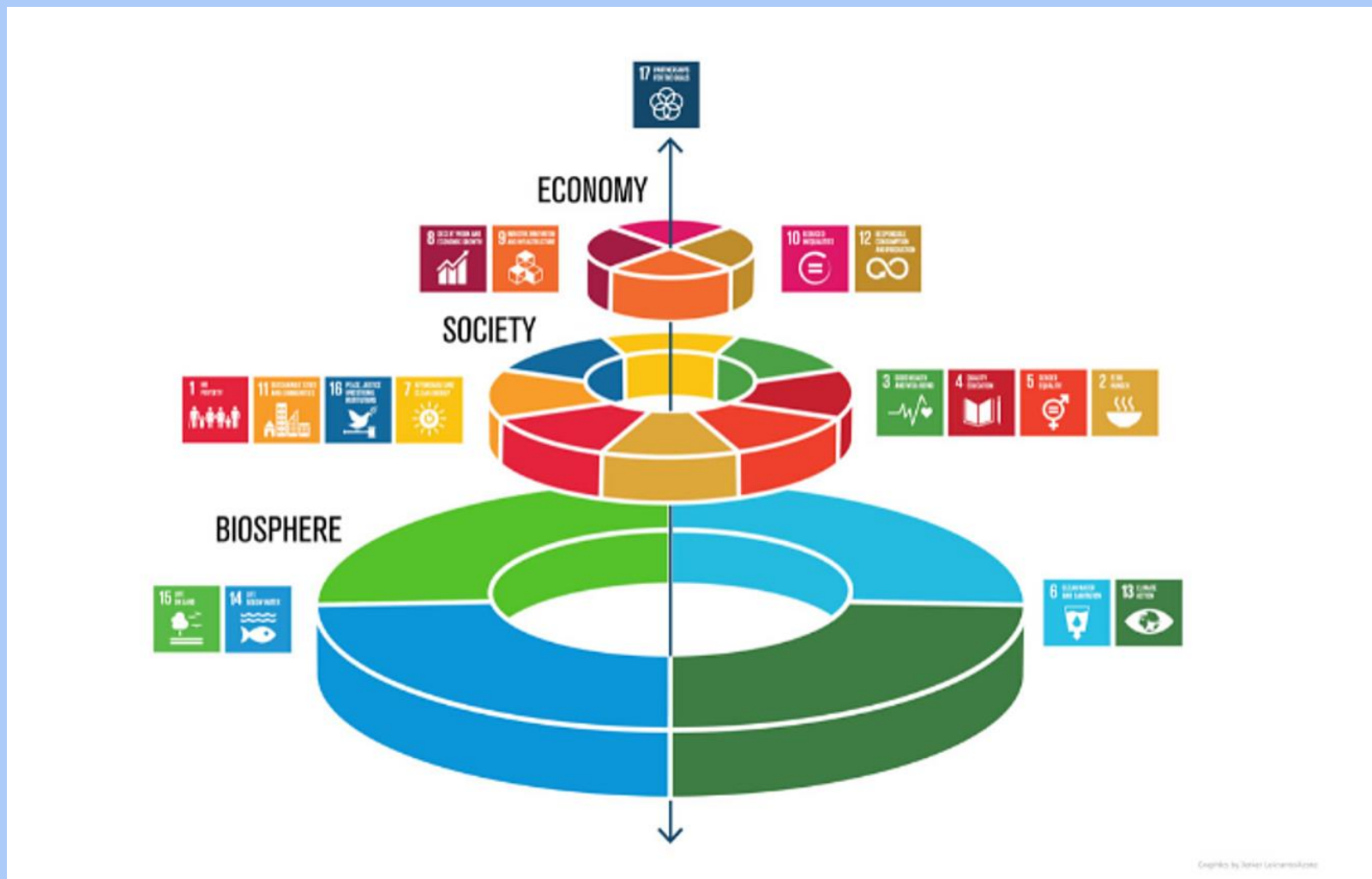
# ◆SDGsへの問い



ではなく…



# 見るべき図は…



◆地球環境問題の解決がすべての土台。社会・経済問題はこの土台があってこそ。

# 客体ではなく、主体としての自然の認識 ——古代の知恵

- ・ 梵我一如（ヴェーダ）
- ・ 草木国土悉皆成仏（仏教・天台本覚論）
- ・ 人も自然も神の被造物（キリスト教）
- ・ タウヒード（すべては神の顕現・一即多・イスラーム）

「なにごとの おわしますかは知らねども かたじけなさに  
涙こぼるる」（西行）

# 『知的協力機関としてのUNESCO』

- ・ 国連教育科学文化機関UNESCOの前身は、第1次世界大戦後に生まれた Société des Nations 国際連盟内に創られていた「国際知的協力委員会 Committee for International Intellectual Cooperation」である。

○参加者；ベルグソン、アインシュタイン、ヴァレリー、マリー・キュリー、ホイジンガー、タゴール等。幹事は新渡戸稲造)

- ・ 第2次世界大戦の勃発と共に消滅。

# 灯火管制下のロンドン会議

大戦中の1943年、ナチス・ドイツ軍空爆下のロンドンで、英国教育相ウィルキンソン女史が招集した「連合国文相会議」(実は亡命政権の集まり)は、戦後の教育復興をいかにすべきか、を考えるための会議だったが次第に「このような悲惨な事態がなぜ起こったのか」を問う議論に深まって行き、最終的にそれは「**お互いの文化に対する無知**」による、との結論に達したのであった。

1945年11月に、ロンドンで採択されるユネスコ憲章は、「**戦争は人の心のなかで始まる。故に人の心のなかにこそ平和の砦を築かねばならない**」という有名な文章で始まるが、それはこの空爆下の文相会議の議論を、UNESCO設立総会で、時のアトリー首相が披露し、それをアメリカ代表で詩人のマクリーシュが書き直したものの。

# 戦後日本の国際社会への復帰はUNESCOから

「永続する真の平和は政府間の取り決めだけでは生まれない。民族間の知的・精神的連帯が必要」と憲章に明記。（前文第5節）

- ・ 1947年、仙台と京都に最初のユネスコ協力会が誕生、その動きが燎原の火の如く全国に広がり、1年足らずして50以上のUNESCO協力会が誕生。
- ・ 1948年に東京で日本ユネスコ協会連盟を設立。
- ・ 1949年にはUNESCO第2代事務局長、ハイメ・トレス・ボデーが、世界にユネスコクラブの設立を奨励、日本の民間ユネスコ運動への評価が1951年の敗戦国日本の国連機関加盟に繋がった。



## UNESCO本部着任後の最初の仕事

- ◆約100カ国に存在する数千のユネスコクラブの組織化。
- ◆UNESCOそのものが地域連盟・世界連盟の設立に尽力
  - ・1974年、ユネスコクラブ・アジア連盟AFUCAの設立（於京都）
  - ・1978年、ユネスコ本部でユネスコクラブ世界大会を開催
  - ・1981年、ユネスコクラブ・世界連盟WFUCAの設立（於パリ）

# UNESCOのSは Hiroshima・Nagasaki から はじめはUNESCO

- ・ 以来、国連機関で文化と共に科学を扱う機関となる。  
1970年、MAB（人と生物圏保護事業）、1971年のラムサール条約・1972年の世界遺産条約締結（日本の加盟は1992年！）
- ・ 「世界遺産」の考えも「自然の保護」の観点から自然科学局のMABが主導したもの

## 国際知的協力委員会再建の議論

---

ロンドンでは、知的協力委員会の再建としてのUNESCOが議論されていた。しかしこの委員会がそうそうたる人を集めながら期待されたほどの成果を上げられなかった理由がその財政的脆弱さであったとの反省から、今度は加盟国政府が財政を保証し、世界の知識人に自由に議論してもらうフォーラムにしよう、という理想論が形をとり、それと同時進行の形でアメリカが強引にニューヨークに誘致していた国連(Organization of United Nations)の専門機関となることが決まった。レオン・ブルムのおかげで、翌1946年、パリに本部が置かれたこの知的機関は発足する。フランス代表の執行委員会委員はアルベール・カミュ。総会代表は各国とも知識人であった。

# 理想論の崩壊

しかしこの、加盟国政府が金を出すは口は出さないという理想論は朝鮮戦争の勃発と共に崩壊し、ユネスコは「政治化」して行くことになる。（服部の鶴見和子との対談『「対話」の文化』（藤原書店参照）。

1973年初頭、私がユネスコに勤務して最初に行ったのが、「国際的知的協力活動」こそがユネスコの使命だ」という主張であった。

# ジュリアン・ハクスレーの 「東西プロジェクト」

初代事務局長ジュリアン・ハクスレーの行った「東西プロジェクト」とは、従来西から東への一方通行であった文化情報の流れを是正し、東側の文化を西側に知らしめる、そのためにインド・中国・日本等の文学をユネスコの補助金で英仏訳する、というものであり、その事業は一応の成果をあげ、例えば日本文学の代表としての川端康成のノーベル文学賞にも繋がった。



# ルネ・マウによる南北の軸

60年代からは東西に代わる南北の軸が、当時の事務局長ルネ・マウによって導入されることになった。ユネスコの主要事業は途上国の教育援助に移っていった。つまりその頃続々と独立を果たしたアジア・アフリカの旧植民地の要望に応えた訳である。私が入った時にも、途上国援助を語らねば、ユネスコに非ず、という風潮があった。

この中であって、知的協力活動こそがユネスコの使命だ、という私の主張はかなり大胆なものであったらしい。この主張に同意を得るには数年かかった。

——私に勇気を与えてくれたのはアンドレ・マルローの言葉——

私の最大の懸念は—科学と伝統智の乖離—

「果たして科学は伝統と対話できるのか？」

# ひとつの言葉

60年代のパリのカフェ、フランスの作家との会話…

「日本は伝統を維持している。  
西欧は伝統が断ち切られた社会だ」

# 黒船と鹿鳴館

幕末日本に現れた西欧は本当の西欧では  
なかったのか？

西欧を師とし、文明開化を唱え、それに追  
いつこうとした明治の先輩達は  
本当の西欧を見て居たのか？

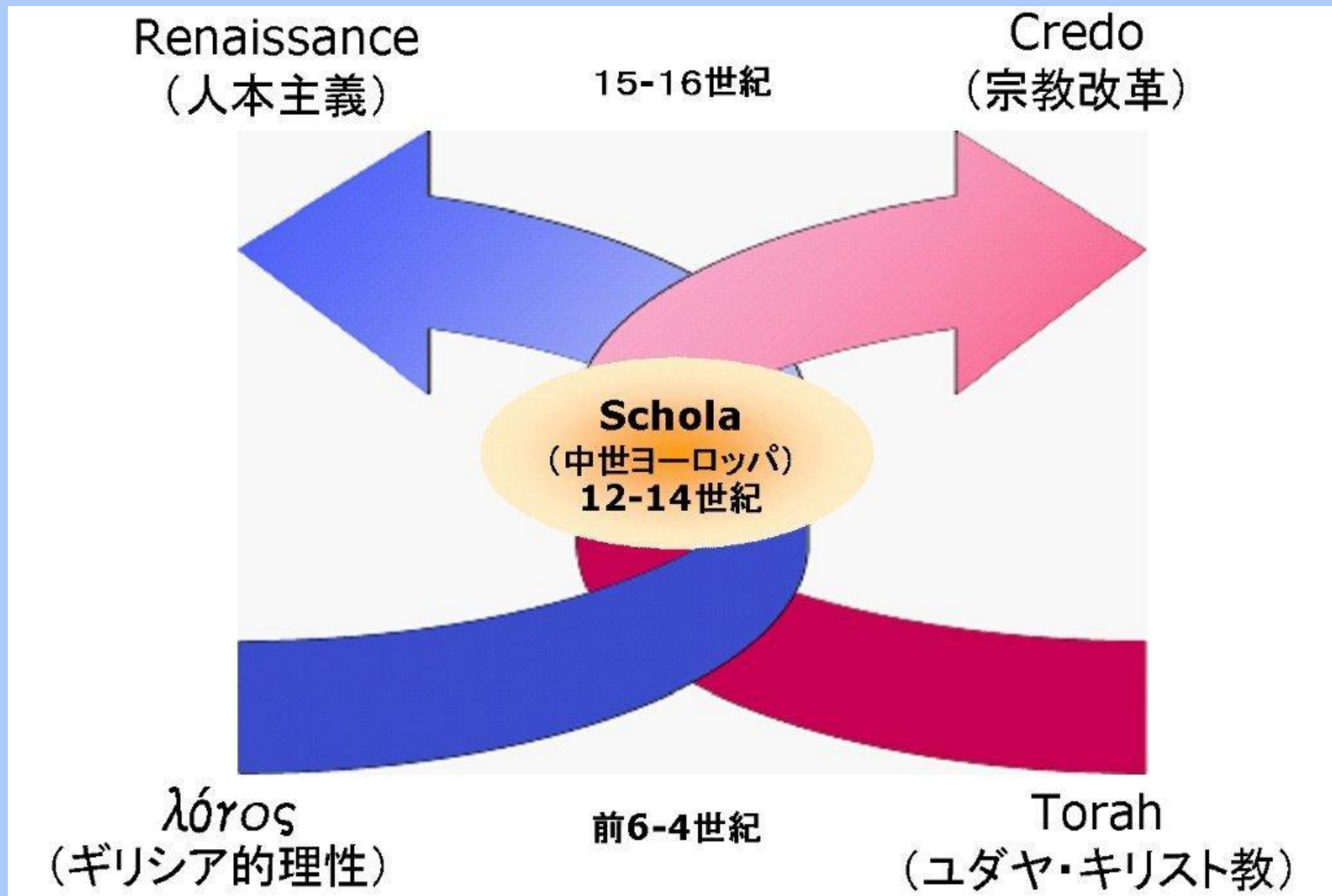
# Central Civilization という暗黙の合意

幾多の文明のうち西欧文明が世界文明になったのは17世紀の科学革命、18世紀の啓蒙時代から。

これが19世紀の植民地主義に繋がり、果ては戦争の世紀を  
生み出したのではないか？



—————ヨーロッパの実像—————



# 異なるものの結合

ギリシャ的理性とヘブライの信仰が止揚されたスコラ哲学が「思考の座標軸」

これが再び分かれて行ったのがルネサンスと宗教改革。

科学革命はルネサンスが準備したもの。

**Humanism=Anthropocentrism**人本主義。

# 神の喪失

科学革命・啓蒙の世紀——神を失った時代、

「**神は死んだ**」——ニーチェは死んでいた神を見つけ、其れをZarathustra（ゾロアスター）の名を借りて告げた。

既に4世紀、ローマによるキリスト教導入により地中海文明の大地母神Magna Materは消滅、ヨーロッパは両親殺しParricideの罪を犯し、孤児となった文明。

「**そのとき、人間は存在の半分を失った**」  
（オーギュスタン・ベルク）

神に代ったもの＝理性, Lumière, Enlightenment

Cogito以外のすべては「客体」となる。自然は資源となる。

「自然との離婚」＝精神の砂漠化が地球の砂漠化を招来した。

自己の存在の穴を埋めるものとしての「所有」の文明  
———→近代文明の本質。

価値はto be「存在」からto have「所有」に。

# 所有の文明=力の文明

権力を持つ、金を持つ・・・

植民地を持つ・・・

持つものとは、自己の外にある物=客体

Anthropocene は、20世紀に始まったものではない。17世紀、科学革命と共に始まった

「人類世」———地球を人類が支配

## 警告した人々の声もあった

“Man, the child of Mother Earth, would not be able to survive the crime of matricide if he were to commit it. The penalty for this would be self-annihilation” ( Arnold Toynbee)

(母なる大地の子たる人類が、もし母親殺しの罪を犯したならば、もはや生き残ることはあるまい。その罰は自己崩壊であろう。アーノルド・トインビー)

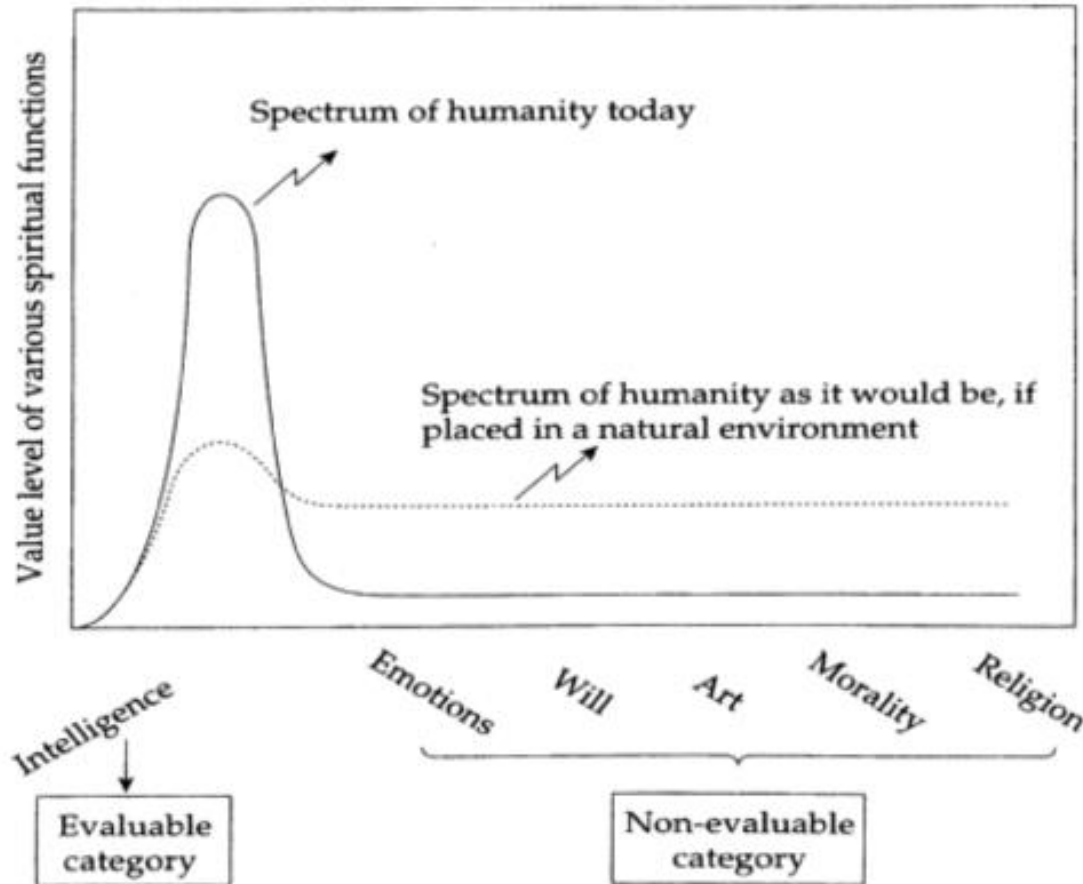
21eme siècle sera spirituel ou ne sera pas. ( André Malraux)

(21世紀は精神性を取り戻さねばならぬ。さもなくば、その世紀は存在しないであろう。

アンドレ・マルロー)

- ・ 20世紀に理性至上主義に反省を促したアレクシス・カレルの図

Fig.1 Unbalanced tendency of value system appearing in humanity today



©Alexis Carrel

19

「もし人が自然と共生していたら、人間の能力の評価は点線のようなになる！」

## ヴェニス宣言の衝撃

1986年、「科学と文化の対話シンポジウムシリーズ」の第1弾として開いたヴェニス・シンポジウム「科学と知の限界」。

新しい統合の学として**Transdisciplinary** を提唱

真実へのHolistic（全人的）アプローチ。新しい開かれた理性＝感性・霊性と響き合う理性。

「科学はその独自の歩みの中で、人類が古代から抱いていた伝統を再発見するに至った」

との宣言は世界に旋風を巻き起こした。



# “Agenda for Survival”

バンクーバー・シンポジウム 1989

「地球の生存は、今や人類の中心のかつ直ちに解決すべき問題となっている。地球の現状は予断を許さないもので、科学・文化・経済・政治すべての領域での迅速な行動と全人類の意識の涵養を必要としている。我々が知るべきは、地上のあらゆる民族が、共通の敵と一致して闘う必要がある、ということだ。その敵とは、環境のバランスを崩す行為であり、また、われわれが未来世代に残すべき遺産を削減する行為である。」

# VANCOUVER DECLARATION

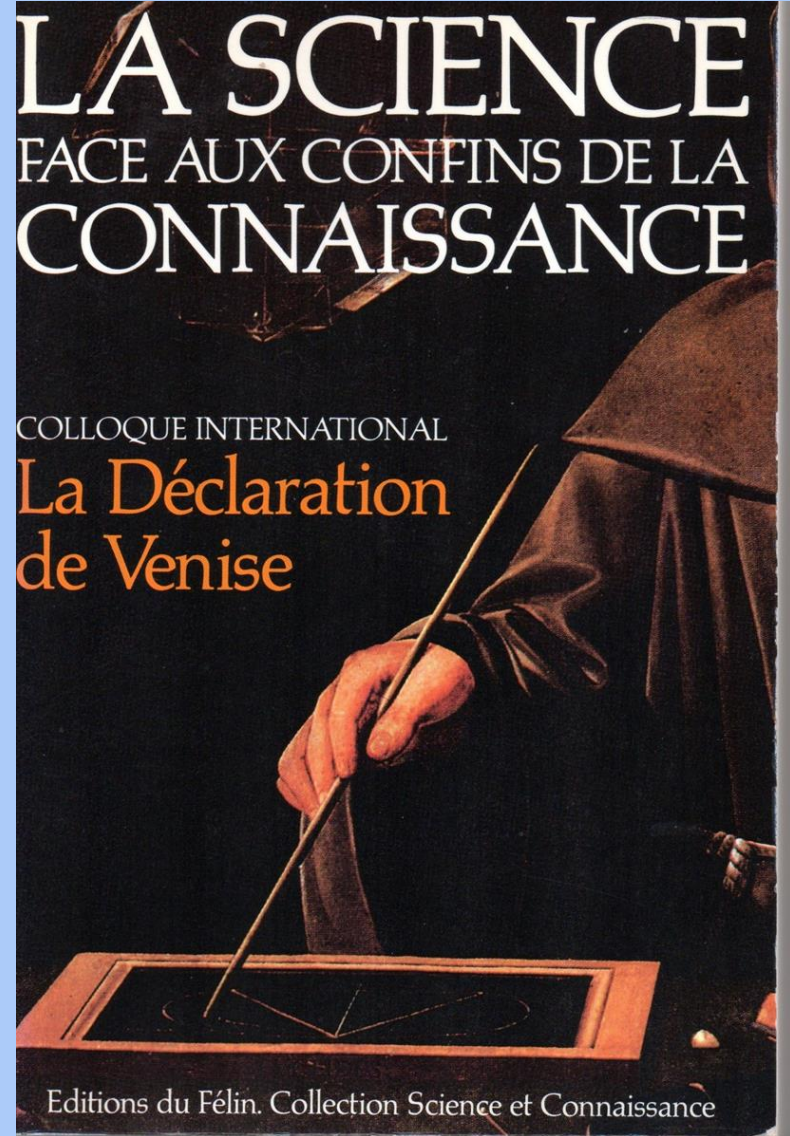
Final report  
of the UNESCO  
Symposium on  
SCIENCE  
AND CULTURE  
FOR THE  
21st CENTURY:  
AGENDA  
FOR SURVIVAL

Canadian  
Commission  
for UNESCO

# LA SCIENCE FACE AUX CONFINES DE LA CONNAISSANCE

COLLOQUE INTERNATIONAL

## La Déclaration de Venise



Editions du Félin. Collection Science et Connaissance

# ECO-ETHICS

ベレン・シンポジウム 1992

(RIO地球サミットの直前)

—アマゾン河口の困難な会合（疲労困憊の事業）日本からの参加者は鶴見和子。

正式宣言に至らず。

しかし **Wholeness** の語はここではじめて。

- ・ 鶴見和子は南方熊楠を紹介、アニミズムの復権を説いた。

# 包中率の発見

ロカルノ・セミナー 1993年「トランスディシプリナリーの学的評価」

アリストテレスの排中律に代る「包中律」 Law of Included middle (Tiers inclu) を定義。  
(オーギュスタン・ベルクは「容中律」と訳す)

・真理の多元性の提唱・・・「間」の哲学の根拠となる。

## Message from Tokyo

# 東京シンポジウム「科学と文化；未来への共通の道」

1995年、UNESCO創立50周年・国連大学創立20周年  
記念事業として開催。

- ◆基調講演に大江健三郎、ジャック・イヴ・クストー
- ◆参加者：エドガー・モラン、ヘンリー・スタップ、カール・プリブラム、  
河合隼雄、中村雄二郎、鶴見和子等

◆マイヨールUNESCO事務局長、デソーザ国連大学長の開会したこのシンポジウムから、重要なUNESCO宣言が生まれる。

- 1997年  
「未来世代のための現代世代の責任宣言」
- 2001年  
「文化の多様性に関する世界宣言」

東京というトポスは何かを生み出す。

◆クストーの基調講演

「生物の種の多い所では生態系は強い。種の数が少ないところでは生態系は脆い。この法則は文化にも当てはまる！」→

◆文化の多様性に関する世界宣言：第1条

「人類にとって、文化の多様性は、自然界に生物多様性が必要なのと同じく、不可欠である。」





SYMPOSIUM

Science and Culture: A Common Path for the Future



ユネスコ・国連大学 シンポジウム

# 科学と文化の対話

— 知の収斂 —

監修：服部英二

Federico Mayor 大江健三郎  
西島安則 Jacques-Yves Cousteau  
Edgar Morin 河合隼雄 Michel Random

科学と精神文化の乖離——  
これこそ21世紀に向けて  
超克すべき課題である

世界を代表する学者・知識人による先覚的叡智の結集

◆ 麗澤大学出版会

※東京シンポジウムの全容を収録



# 「全は個に、個は全に遍照する」

カール・プリブラムとヘンリー・スタップが起草した「東京からのメッセージ」

宇宙にはかつて古代の知恵が抱いていた自然観に近い「全一的秩序」> Wholenessが存在することを発見した」

This new holism recognizes the enfoldment of the whole in its 'parts' and the distribution of the 'parts' over the whole.

この新しいホリズム（全一観）は、全体には部分が包含され、部分は全体に行き渡っていることを認識する。

## ETHICA MUNDIALE (Global Ethics) の発信

1997年のバレンシア・シンポジウムで、ハンス・キュングが提唱。

「すべての宗教は、信仰の対象ではなく、倫理の次元で収斂する」と説く。

「過去2000年のイメージは飛ぶ矢であった。我々は、それを星座のイメージに変えねばならない」 (ウンベルト・エーコ)

# 「普遍」 Universalへの疑問

「国際会議に行くと、そこに普遍という黄金の尺度が惹かれていて、なかなか其れを越えられない」 (山折哲雄)

「新世界秩序は死産児であった。我々が如何に努力しても、文化的障害を越えられない。 (マーディ・エルマンジャラ)

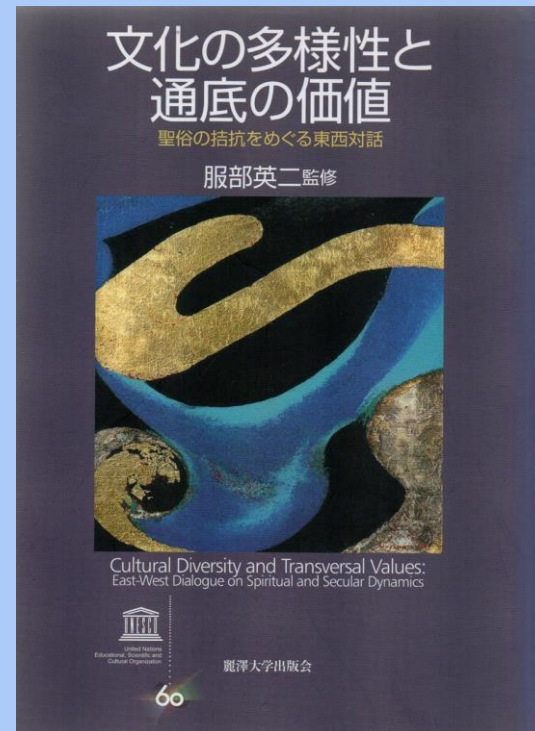
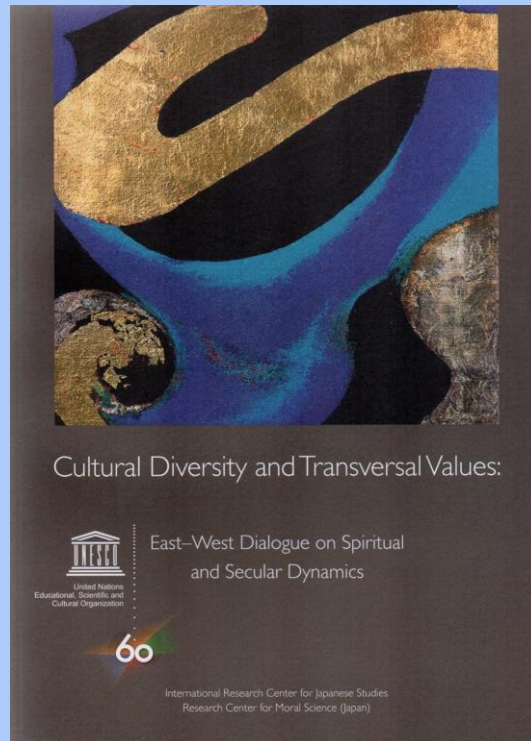
UNI (ひとつに) VERSO (向かう) . . . 一見素晴らしいことに見える。

しかし、その一つがあらかじめ定められていることが問題。その一つとは、「論理的・男性的・西欧的」なもの。

# 通底の価値（Transversal Values）の提唱

2005年 「文化の多様性と通底の価値」シンポジウムをUNESCO本部で開催。  
文化の多様性を尊重しつつ、文明間に通底する価値の存在を探る。

——UNESCO（文化局・社会科学局）、日本政府常駐代表部、外務省、文部省、  
国際日本文化研究センター・国際交流基金、公益財団法人モラロジー研究所等 が  
協力。



# 対話とは旅に出ること

対話は交渉と異なり、自己が旅にでること、他者と出会い、自己も相手も変る。  
お互いに高め合う。他者を他者として尊重しながらその底に響き合うものを認める

「同して和せず」 == 普遍

「和して同ぜず」 == 通底

・ UNESCO側責任者；松浦晃一郎事務局長、F・リヴィエール官房長、以下文化局・社会科学局の代表。

・ 日本側出席者、川勝平太・安田喜憲・松井孝典・森本公誠・山脇直司・佐々木瑞枝等。

・ 世界からの出席者、杜維明（とううえいみん）、ジャン・ボベロ、パレンシア＝ロス、ジャック・ルグラン、オドン・ヴァレ、ハシン・ファンタール、ヘンリー・スタップ、オーギュスタン・ベルク、アミタイ・エチオーニ、フレッド・ダルマイヤー等。

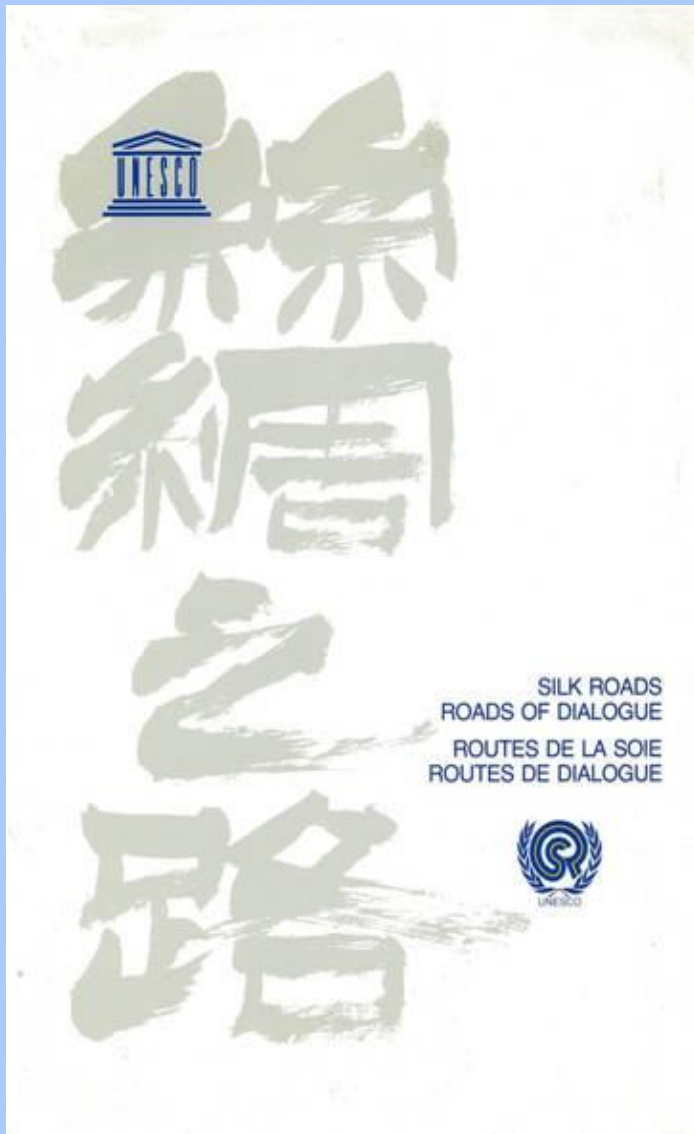
## 「文明間対話」——シルクロード；対話の道総合調査より

1985年夏、中国北方の砂漠の上空で発想；10月に原案を起草；

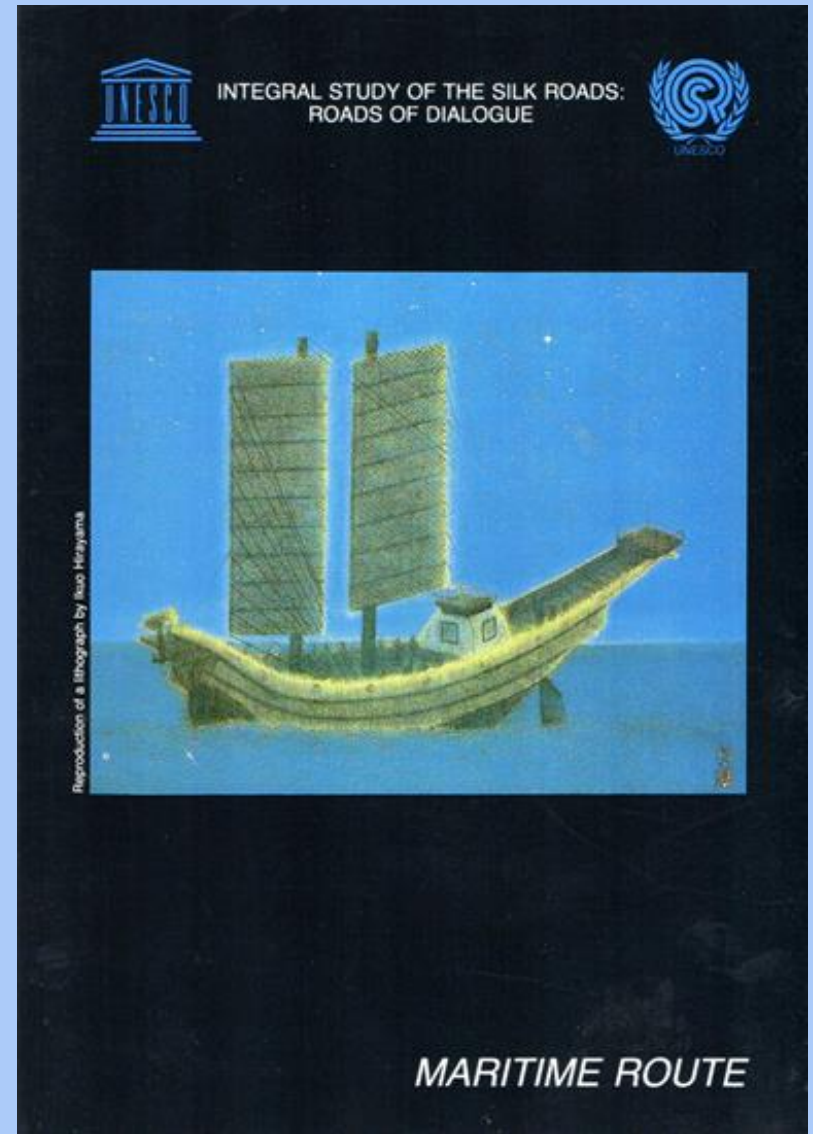
“Les Routes de la Soie, terrestre ou maritime, étaient par excellence les routes de dialogue des civilisations”

「シルクロードは、陸の道、海の道を問わず、勝れて文明間の対話の道であった」

冒頭の1行が、30カ国2000人の研究者を引きつけ、6カ年計画となる。

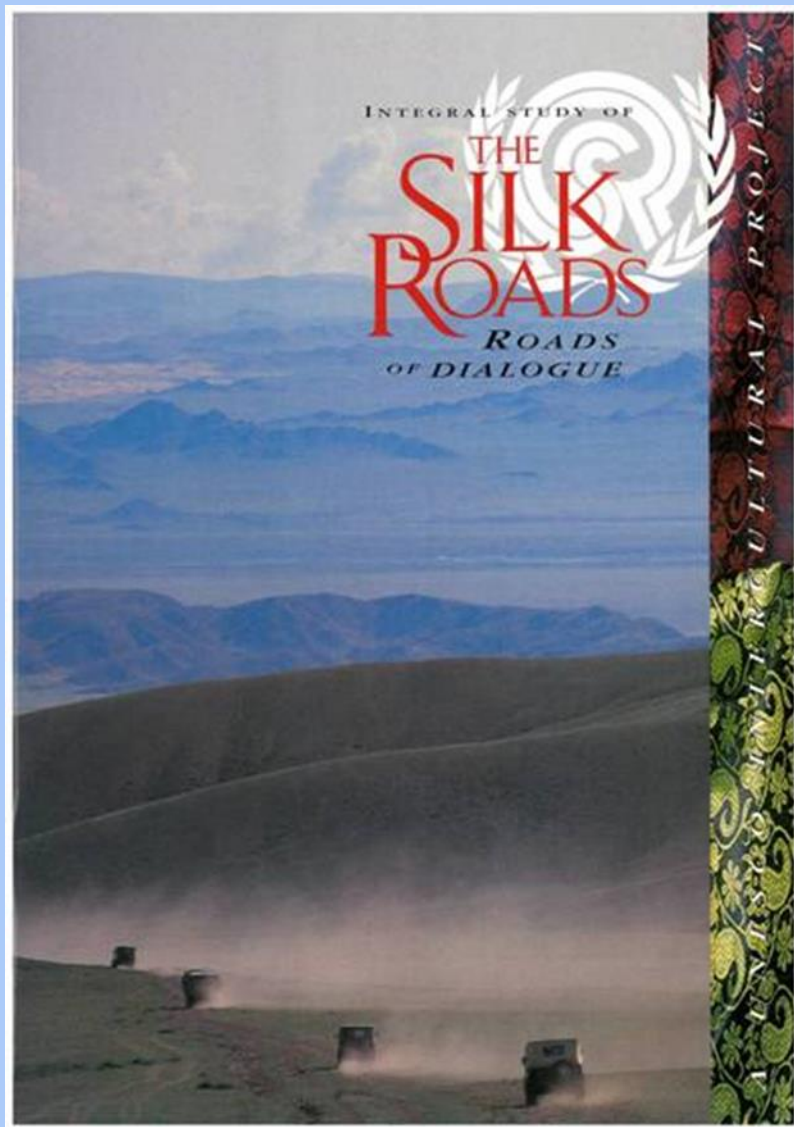


・資料用ファイルは藤枝晃氏の書。



・海の道パンフレットは平山郁夫氏の画





・ 陸の道パンフレット



・ 1991年、3月3日、大阪天保山埠頭に入るフルク・アル・サラマ号



# 文明間対話国際年

1998年シルクロード；対話の道総合調査のメインメンバーのイラン（ペルシャ）のハタミ大統領が、ハンチントンの「文明の衝突論」に対抗するものとして国連総会に提案、2000年の「平和の文化国際年」に続き2001年が「文化間対話国際年」とされた。

（この話は別の機会にしましょう）

・・・一つの言葉の世界語としての定着は難しいが、世界の良識はそれを受け入れることを実感。

Métamorphose des civilisations

服部英二

転生する文明

文明は、時空を変えて  
生き続ける!

ユネスコ「世界遺産」の仕掛け人であり、「文明間の対話」を発信した著者が、世界100か国以上を踏破するなかで見出した、文明の転生と変貌の姿を描く、初の「文明誌」の試み。

定価：本体 3000 円 + 税 藤原書店

Letters from  
the Silk Roads

Thinking at the  
Crossroads of Civilization

EIJI HATTORI

TRANSLATED FROM JAPANESE BY  
WALLACE GRAY

UNIVERSITY PRESS OF AMERICA®

———終わりに———

## エデンの園の二本の樹

---

神が植えた第1の樹は「生命の樹」、第2の樹が「知恵の樹。

- ・ 神、アダムとイヴに；「知恵の樹の実を食べてはならぬ」
- ・ 蛇、「この実を食べればあなたは神の如くなる」

蛇は真実を語っていた。

人類は神の如くになり、第一の樹「いのちの樹」を忘れて行ったのが人類史

# 未来への道

---

- ・ 自然の一部としての人間存在を再認識
- ・ 他者の存在のおかげで自己がある、との自覚を。
- ・ Sympathy（自己の価値観と同じものへの共感）から Empathy（自己と異なる価値観を持つものとの共振）へ。
- ・ 利他主義 Altruism の倫理 = 地球倫理

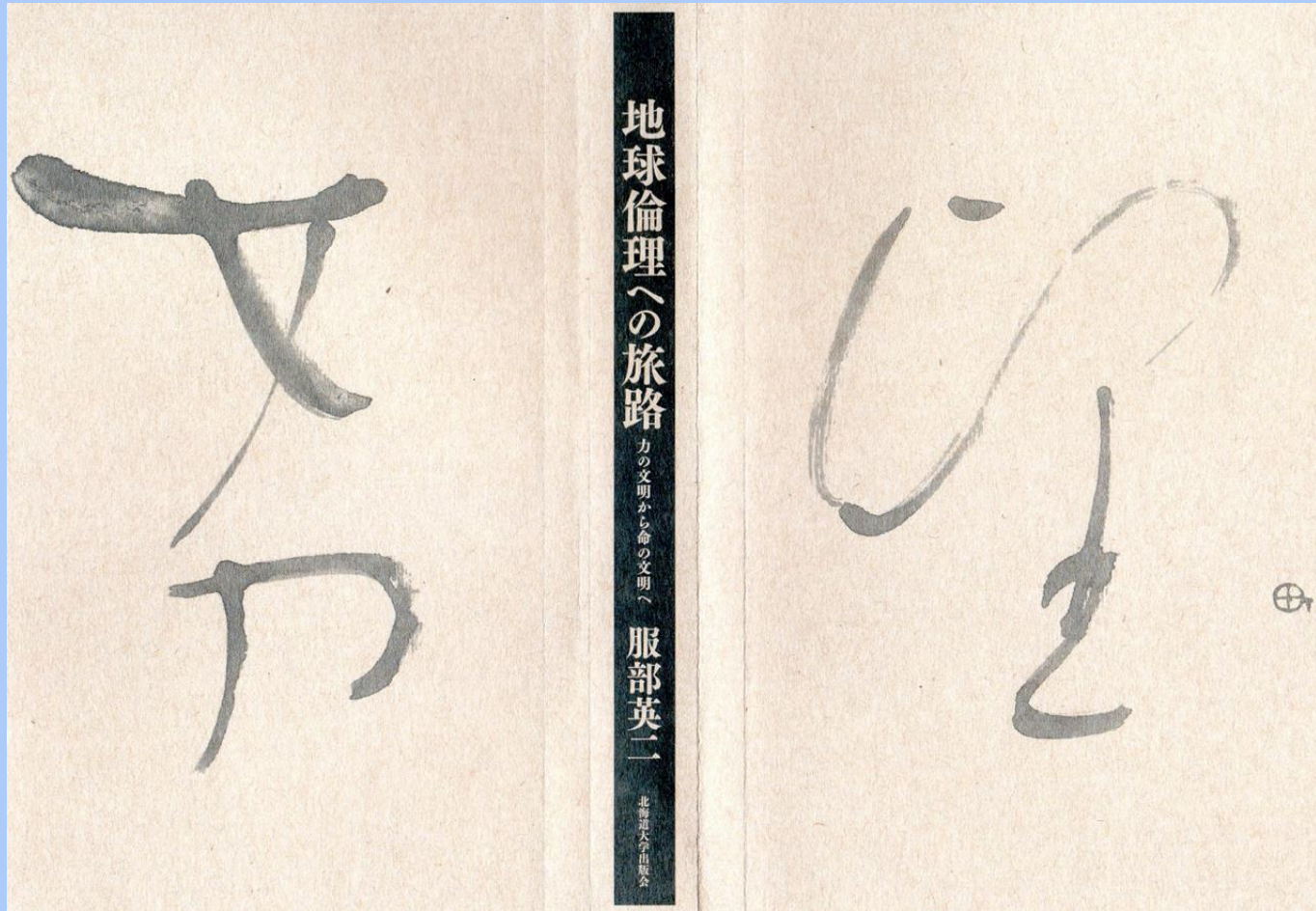
# In-Betweenness

## あわいの智

- 二項対立の倫理（排中律）から、「間の論理」包中律へ
- 人間存在の風土性を認識、自然も客体ではなく、各自の中にある限り主体性を持つ、と知る。  
（オーギュスタン・ベルクの風土学Mesology）
- 間にこそ光がある、と知る；「あわいの智」



# パンドラの箱の底に残ったもの



——希望—— (町春草書)